

この読書感想文では、自らのグローバルシチズンシップに対する理解、『日本株式会社顧問弁護士一村瀬二郎の「二つの祖国」一』を踏まえ、グローバルシティズンとしての意義を再考する。

グローバルシチズンシップとは

まず、この読書感想文の課題として提示されているグローバルシチズンシップの意味について考える。近年、社会の中で使用されるグローバルシチズンシップという言葉には主に2点の意味が存在すると考える。一つ目は、その土地やコミュニティに生きる人々が社会で正当に生きる権利である。二つ目は、法律やルールなど様々な基準を一つの軸として1人1人の意見や行動が重要視される権利である。つまり、大きな社会の括りの中でどんな背景を持ち得ようとも社会で生きられる権利を指すのがグローバルシチズンシップである。私にとってのグローバルシチズンシップとは、この2つの権利に加え、自分や他者の権利や機会が確保されない場合にも社会全体で繰り返し議論する権利だと考える。私は大学の講義の中で日本における難民問題を学んでいるが、日本の難民申請者の声として次のようなコメントが紹介された。「日本の制度を変化させるのは難民申請者の当事者ではなく、日本の有権者である。」という意見である。この意見のように問題の根本を変化させるのは、当事者ではなく直接問題解決に導ける人々が行動をすることが肝心である場合もあると学んだ。この例のように、自分が当事者であるかないかに関わらず、誰もが社会全体で議論できる権利があることこそがグローバルシチズンシップだと考える。

課題図書を読んで

次に課題図書において印象に残った点を挙げていきたい。特に印象に残った点は、主に2つある。

一つ目は、本書の帯にも「大和魂とアメリカン・スピリッツ」と表現されるようにアメリカ国籍を保有していた村瀬氏が日本人というアイデンティティを確立していた点である。具体的に本書の中では「二郎は軍歌を覚えることが、まるで日本人の証でもあるかのように必死になって覚えた¹。」「両親ともに日本人とはいえ、二郎は間違いなくニューヨークで生まれ、ニューヨークの学校で学び、米国籍を持つ、歴としたアメリカ人であった²。」とある。戦争時というナショナリズムが至るところで色濃く反映され、国を最優先事

¹ 児玉博, 2017, 『日本株式会社の顧問弁護士一村瀬二郎の「二つの祖国」一』, p.52, 東京: 文藝新書.

² 児玉博, 2017, 『日本株式会社の顧問弁護士一村瀬二郎の「二つの祖国」一』 p.55, 東京: 文藝新書.

項とする社会の中で自分のアイデンティティを蔑ろにしない姿勢がとても印象的である。ここで理解できることは、どんな状況にいようと本来自身のアイデンティティを主張する権利、自身のアイデンティティを形成する国々に対して責任を果たすことができる権利があるということである。

二つ目は、アメリカで活躍する日本人はもちろん、様々な背景を持つ人々に対して力になりたいという強い意思を掲げていた点である。本書では日本人をはじめアジア人に対し、特に当たりが強い時代の中で日本人やアメリカ人の意図、仕事での目的からプライベートまで親身になって向き合う態度や姿勢が示され、村瀬氏は人間性の豊かさ存在であったと感じた。弁護士として、そしてアメリカ・日本社会に生きる存在として、さまざまな状況の中で決して問題に対し目を逸らすことなく根気強く活躍した姿が印象的であった。

自分が目指すグローバルシティズンとしての姿

私が目指したいグローバルシティズンとしての姿は主に2つある。

一つ目は、自身の背景によって問題が生じる場合に心から願うことを素直に伝えられる権利を確保できるよう手助けできる存在である。私は母子家庭で育ってきたが、ひとり親家庭を理由に自分の挑戦を諦めた経験が多い。また、父親とは節目節目に連絡を取る状況にあるが父も既に父自身の家庭があるため普段感じていることを素直に伝えることに対して抵抗がある。どんなコミュニティの中でも意見を交わすことを恐れずに普段の感情や思考の連鎖によって伝えられないことを伝えることで自分や他者に素直になれるようなサポートができる存在になりたい。

二つ目は、相手の存在と自分自身を対等な目線で理解を深められる人である。近年、たくさん孤独を抱える人々に向けて様々なアプローチが取られているが、孤独を抱える人々は決して自ら行動せず孤独という状態に陥っているわけではないと考える。様々な行動の中で相手を受容しようと繰り返し行動する中で、自分のSOSに気がつかなかつたり、人に伝えることが相手にとってどんな意味をもたらすかを第一に考えたりしている証拠ではないだろうか。孤独を抱える場合、自分が何のために、誰のために生きているのかわからなくなることも多い。だからこそ、相手に直接的に向き合うことが難しくとも「あなたはここにいる」という意思を伝えることが重要だと思う。本書における村瀬氏の自分と関わりのある人々を支え続ける姿勢に通ずる部分だと考える。